

心を受け止める場所

ー つながりを育むフリースクールの設計 ー

Keywords

不登校 フリースクール コミュニティ



DZ22151 椎名果那美

1. はじめに

令和五年度の文部科学省の調査において、不登校の児童数が過去最多を記録したことが報告された。現代の日本では、不登校児童の増加が顕著であり、深刻な社会問題として注目されている。行政やNPO法人では、不登校を未然に防ぐ施策を実施やフリースクールや適応指導教室といった学校以外の場の提供など行ってきた。しかし、増加傾向は依然と続いており、サポートの在り方、施設の在り方を再考するべきだと感じた。本研究では、不登校の子どもたちを対象としたフリースクールの在り方を建築的、都市的な観点から提案する。

2. 研究背景（不登校に関する調査）

2.1 不登校者数の推移

小学生・中学生ともに増加傾向にある。

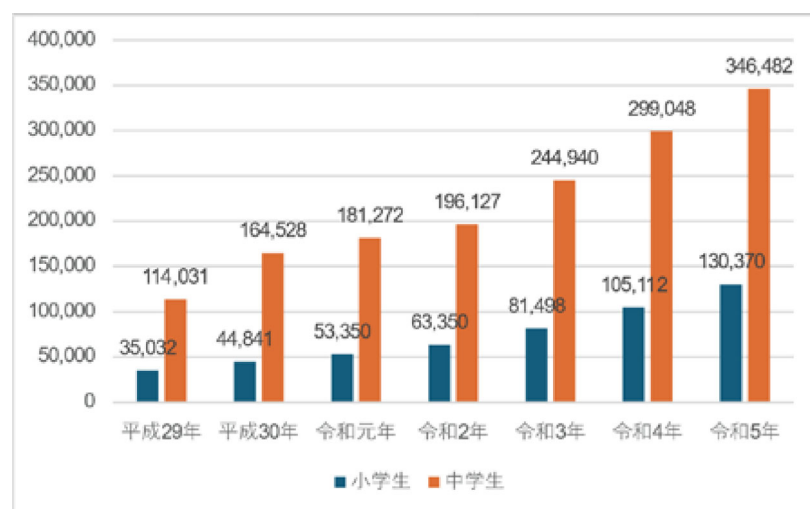


図1 小中学校における不登校児童数の推移
(文部科学省より作成)

2.2 不登校の関連要因

下記のグラフは不登校の児童生徒には「あなたが最初に学校に行きづらい、休みたいと感じ始めたとき、学校や家で、次のようなときに、つらいと感じたことはありましたか。」という質問に対する回答である。不登校になるきっかけは単一ではなく、複数の要因が絡み合っていることが分かる。

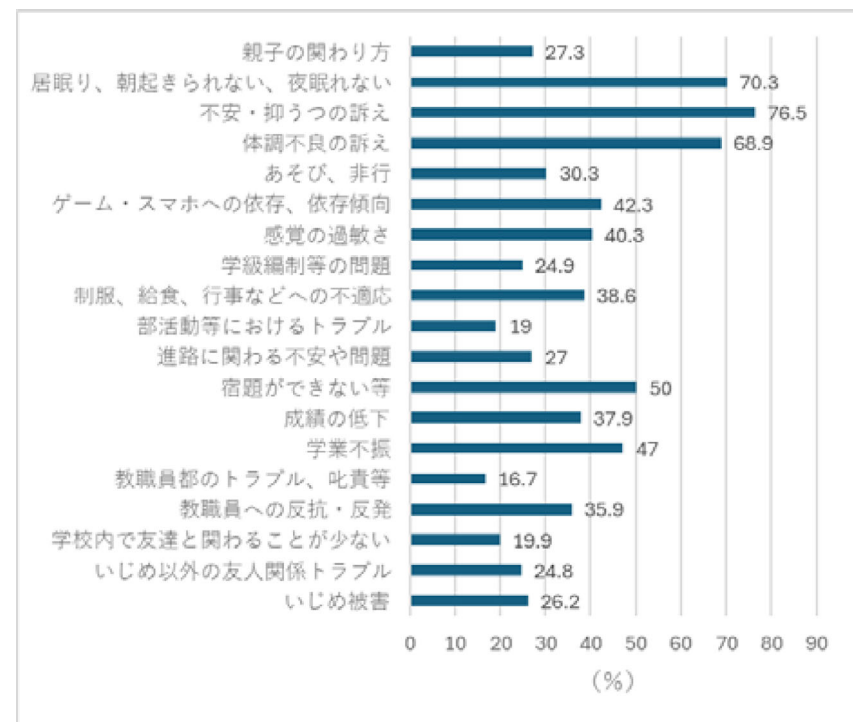


図2 不登校の関連要因についての不登校児童による回答
(文部科学省より作成)

2.3 不登校児童への対応における変遷

日本ではこれまで憲法や学校教育法で教育を受ける権利が保障されてきた。そのため、学校や中学校に通うことが当たり前とされ、不登校児童に対しては、学校復帰させることが重要であると考えられていた。

しかし、不登校児童は年々増えており、従来の小学校、中学校だけでは多様なニーズに十分に対応することが難しかった。そういった背景から、学校以外の場所での学びを認める教育機会確保法が制定された。この法律により、必ずしも学校復帰を目標とするのではなく、社会的自立を目的とした学びが重視される方向へと変化していった。

2.4 フリースクールとは

フリースクールとは、不登校の子どもに対して、学習活動、教育相談、体験活動などを行う民間の教育施設を指す。団体によって運営方針はさまざまであるが、調査を進める中で、大きく二つのタイプに分類できることがわかった。

- ・居場所型

子どもたちが安心して過ごせることに加え、自由意志を尊重した体験活動やプロジェクトを自分で選ぶことができるなど、過ごし方を自由に選択できることを重要視している。

・学習支援型

復学や進学を目指すタイプのフリースクールである。学習の遅れを取り戻すためのサポートや、学校生活に必要なスキルを身につけるためのプログラムがあることが特徴である。

3. 問題提起

しかし、多くのフリースクールでは活動がそのコミュニティ内にとどまっており、社会との関わりが十分でないといえる。また、雑居ビルの一角にあるなど、ハード面でもまちとのつながりがほとんどない。日常的に多様な人と出会い、価値観や知見を広げていくことが社会性を身に着けていけるのではないかと思う。

4. 研究目的

不登校の子供たちの心理段階に着目し、人とのかかわりを通して、段階的に社会性を身に着けていくことが出来る場を提案する。

4

4.敷地概要

対象敷地は東京都三鷹市の玉川上水付近である。三鷹市は近年不登校児童数が急増している地域である。



図3 敷地周辺のエリア

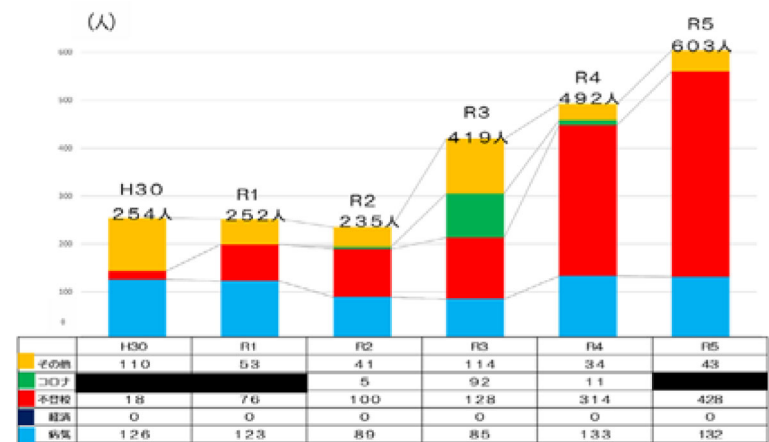


図4 不登校児童数の推移（三鷹市ホームページより作成）

この地域は、保育園、小学校、中学校、児童遊園、井の頭公園など、教育機関や屋外のあそび場が集積している地域であり、親御さんや子どもたちが行き交う。このネットワークの中にフリースクールを計画することで、子どもたちやその親がフリースクールを認知させ、日常の中でフリースクールの存在が当たり前になる。登校中に学校に行けなかった子どもの逃げ場になることも期待できる。

また、この地域は個性豊かな店舗が立ち並んでいたりと、飲食店などでは人が集まり、にぎやかにしている様子が伺えたりと多種多様な人々を受け入れる許容度が高いまちだと感じた。そのためフリースクールをまちに開く設計であっても、地域住民間で見守る意識ができるのではないかと考える。

5. 参考文献や註など

・児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査 文部科学省

https://www.mext.go.jp/content/20241031-mxt_jidou02-100002753_1_2.pdf

・小・中学校に通っていない義務教区段階の子供が通う民間の団体・施設に関する調査

文部科学省 平成27年8月

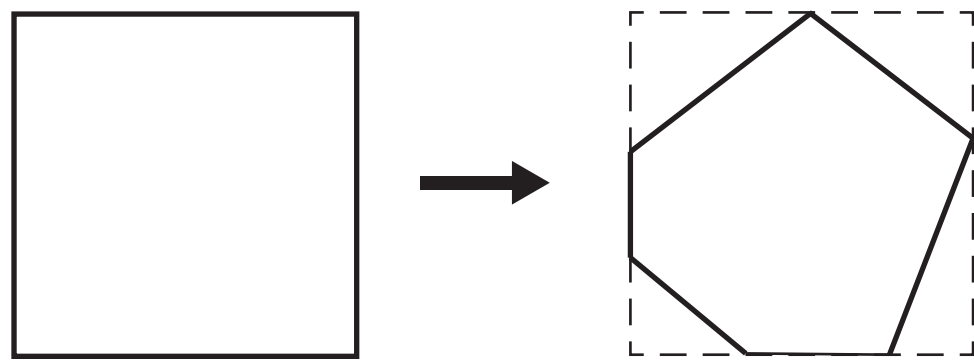
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tyousa/_icsFiles/afieldfile/2015/08/05/1360614_02.pdf

・長期欠席・不登校児童・生徒の支援に関するまとめ 三鷹市ホームページ 2025年4月

https://www.city.mitaka.lg.jp/c_service/113/attached/attach_113611_1.pdf

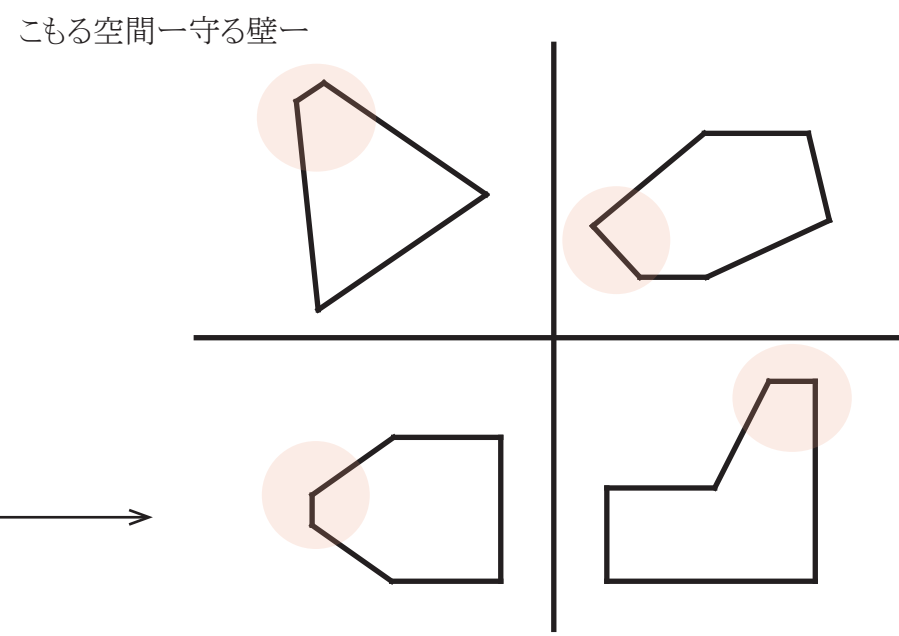
I. 諸室の設計手法

多面形の変幻自在なポテンシャルに着目し、
この形をベースに空間構成を行っていく。



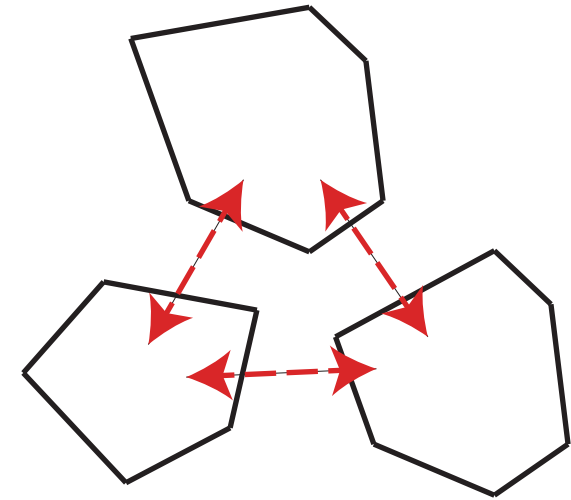
従来の諸室
四角形で、視線は四方に広がる

多面体の諸室
四方の角を削って多面形にすることで、
視線があらゆる方向分散する。
開きたい方向にの辺を長くしたり、閉じ
たい側の辺を短くすることで
視線を操作する。



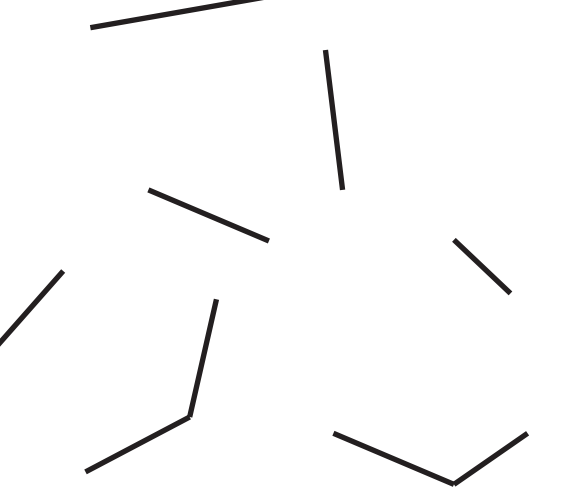
鋭角を作り出すことで、壁に
守られた空間を生み出す

活動を魅せる場—視線の操作—



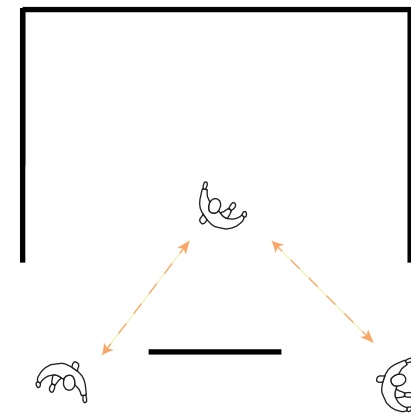
魅せたい方向に向き合
わせることで、お互いの活動
を視認できる

交わる場—視線と動線の操作—



活動を魅せる場の状態から
壁を減らしていくことで、自
由に行き来できる場となる

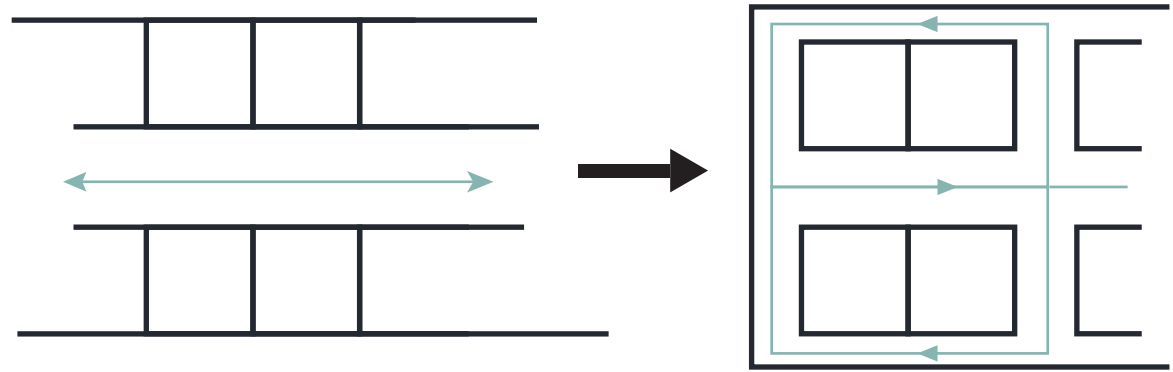
見つめ直す場—他者の気配が感じられる場所—



自分自身のことに集中する環境
を作りながらも、見えないけど、
他者の気配が感じられるような
設計

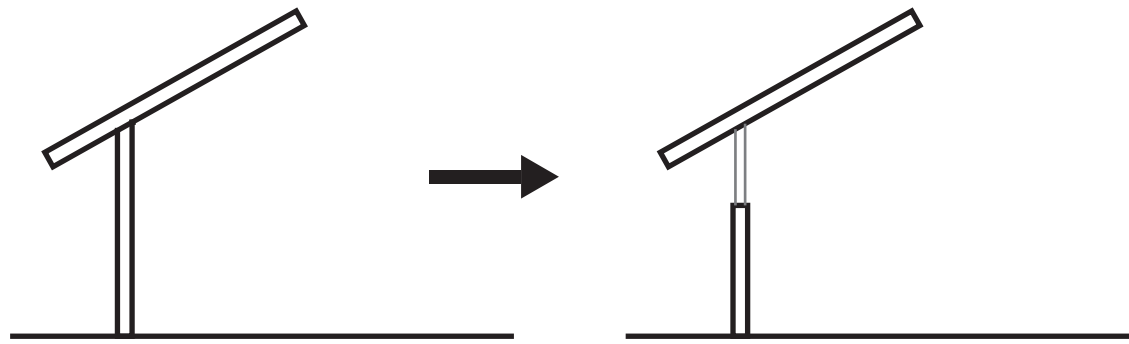
II. 諸室配置の設計手法

フリースクールに通う子どもたちの中には見られたくない子、注目されたくない子がいるため、
回避性を設け、個人がどこへ向かうか特定出来ないようにする。



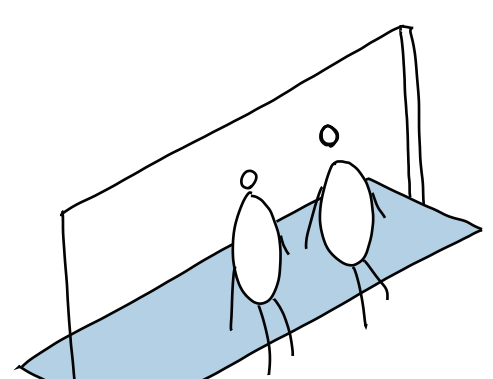
III. 断面の設計手法

完全に仕切るのではなく、声が開こえたり、においが感じられたりする。
同じ空気感の中にある設計

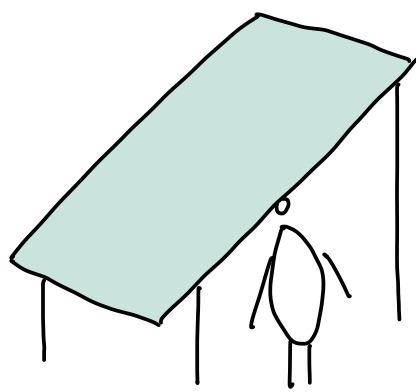


IV. 居場所となりうる様々な場所

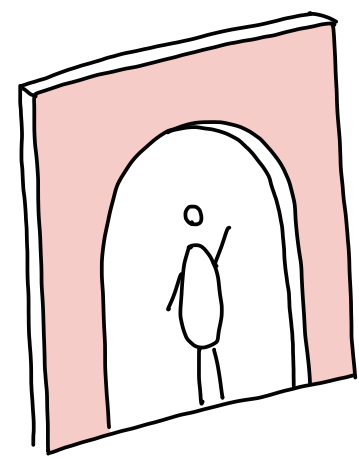
人との繋がりが見られる仕掛けや落ち着ける場所を点在させる。



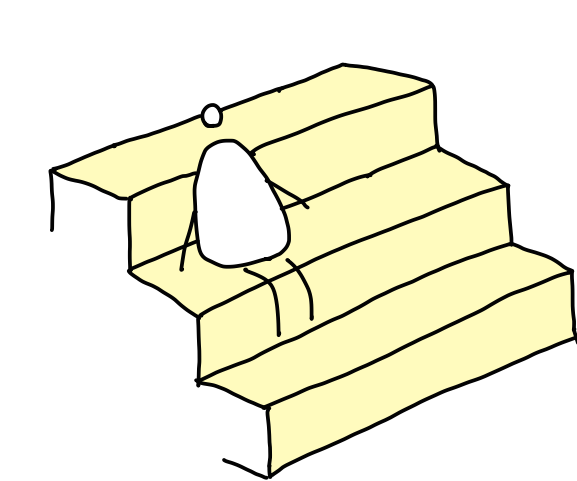
壁と一体となったベンチ



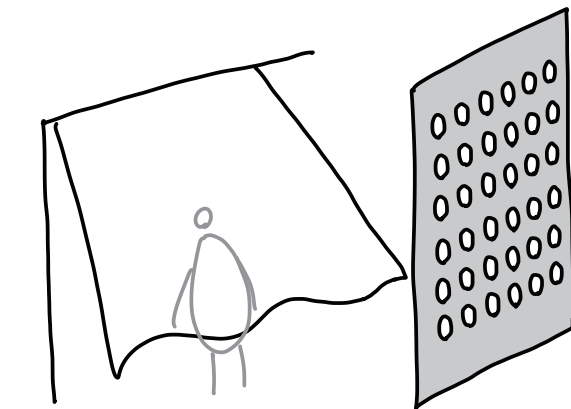
低い屋根



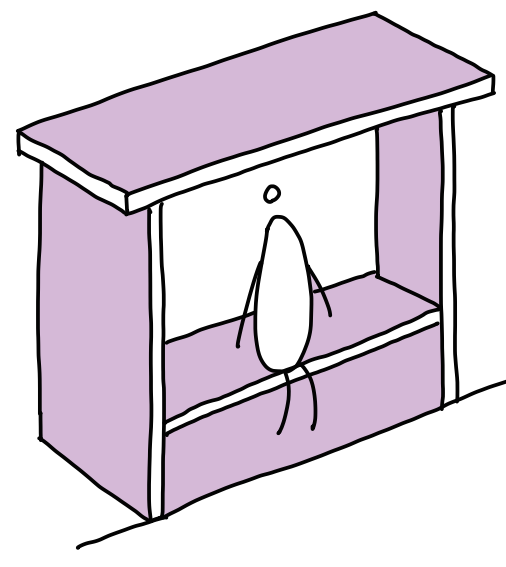
ちょっとしたステージ



座れる階段



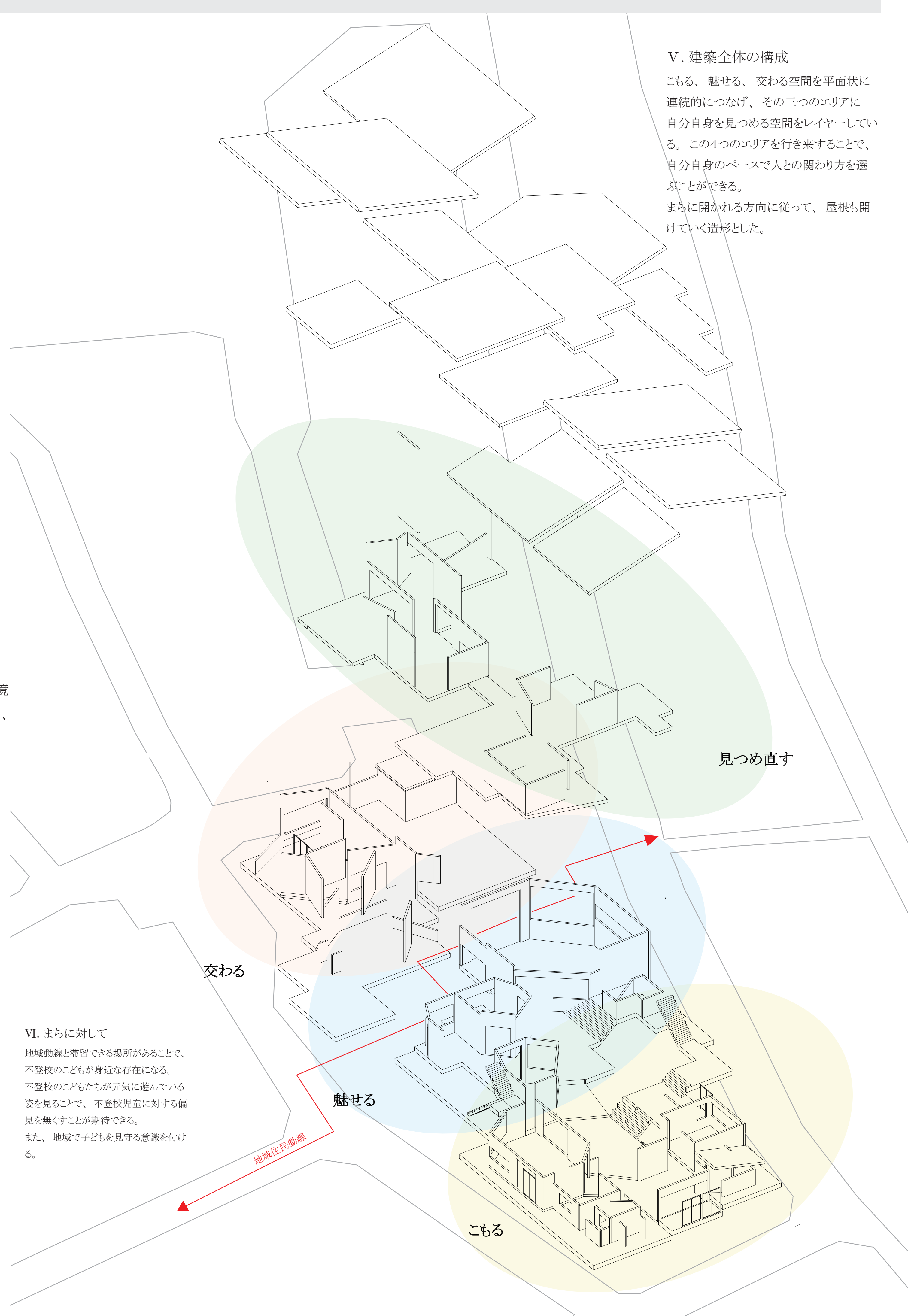
気配が感じられる間仕切り



囲われたベンチ

V. 建築全体の構成

こもる、魅せる、交わる空間を平面状に
連続的につなげ、その三つのエリアに
自分自身を見つめる空間をレイヤーしてい
る。この4つのエリアを行き来することで、
自分自身のペースで人との関わり方を選
ぶことができる。
まちに開かれる方向に従って、屋根も開
けていく造形とした。



VI. まちに対して

地域動線と滞留できる場所があることで、
不登校の子どもが身近な存在になる。
不登校の子どもたちが元気に遊んでいる
姿を見ることで、不登校児童に対する偏
見を無くすことが期待できる。
また、地域で子どもを見守る意識を付け
る。